神秘主義の心理学

ムージルの「境界体験」とギルゲンゾーン(一)

大川

〈別の状態〉の「心理学的解明」

とつ --- 〈別の状態〉。理性と神秘主義の相克の彼方に見果てぬユートピアの夢を追いつづけた小説、『特性のな 場合、〈aZ〉(= anderer Zustand)という暗号に文字どおり記号化されて、書き記されているためである。そし ない。そのほとんどが、遺稿中の覚書や未発表の草案、あるいは日記といった作家の工房内部で、しかも多くの て、暗号の常として、必ずしもそこに明確な説明がほどこされているわけでもない。そうしたなかで唯一例外的 っているが、ムージルのテクストのなかで一般の読者が直接この言葉に触れる機会は、意外にもそれほど多くは い男』において、この言葉は、神秘主義への傾きをもっともあらわに示す記号としてきわめて重要な意味をにな ムージルの言う〈別の状態〉とは何かを確認しておくために、まずはこのエッセイを概観しておこう。そこには、 に、作家自身が〈別の状態〉について公的に語ったものに、一九二五年のエッセイ『新しい美学の萌芽』がある。 〈特性の喪失〉や〈可能性感覚〉とともに、ある種の魔術的磁力をもってムージルの読者を魅惑する言葉のひ

丟

ムージルにおける神秘主義と心理学の問題を考える最初の糸口もまた、ふくまれている。

だし、その紹介の仕方が客観的にみて著しく均斉を欠くにせよ、ムージルがバラージュの映画論の核心を踏みは を手がかりにあるべき芸術の機能を論じた、ムージル自身の、いわば美の綱領と呼びうるものとなっている。た ある。だが、映画理論史上、 いえる部分はごくわずかで、また引用の仕方も偏っており、その内実はむしろ、バラージュの述べる映画の特質 に、本来、バラージュ・ベーラの映画理論書『視覚的人間』(一九二四年)の書評として書かれたはずのもので 新しい美学の萌芽』は、その副題「映画のドラマトゥルギーについての注釈」があらかじめ示しているよう 画期的な名著といわれる書物の書評にしては、純粋にこの書の意義の紹介と論評と

ずしているわけではない。

常の意味連関を離れ、それ自体の固有の意味を越えた、人間と同等のなまなましい相貌を帯びるようになる、 いうことだろう。スクリーン上における事物のこの「観相学的印象」(physiognomischer Eindruck) ないし る」(同上)。すこしわかりにくい言い方だが、要するに無声映画では、言葉が失われた結果、 である」「映画にとって決定的なのは、あらゆる事物が、例外なく、必然的に、象徴的であるということだ。と 摘である。「その前提となっているのは、どの対象物の像も、元来、ある内面の状態を意味しているということ 物の格差が消失し、 いうのも、 とんどただひとつのことなのだが、それは、映画(=無声映画)のなかでは、言葉をもつ人間と、 ムージルが「映画に帰属する根本体験」としてバラージュの論述のなかから引用しているのは、内容的にはほい すべての事物が私たちに、 人間と同質になった事物はそれによって「生気と意味を獲得する」(E一一四二)、という指 私たちがそれを意識しようとしまいと、 観相学的印象をあたえるからであ あらゆる事物が日 もの言わぬ事

る れているのであるが、いっぽうムージルは、この映画技法との関連についてはまったく触れず、次のように言う。 それは、 ٧J のひとつであり、 なく、「ふたつの世界のこの境界」(diese Grenze zweier Welten 傍点筆者)にバラージュが到達したことに、 ;堅牢さの衣に身を固めた我々の世界像のなかの、いわば柔らかな部位にあたるだろう」(E一一四二、四三)。 「象徴的相貌」(symbolisches Gesicht)こそは、バラージュが『視覚的人間』においてもっとも強調したこと .った「通常の心理学」の概念を使って説明可能だが、しかしそこにはまた、そのような心理学的連関とは異な ·映画の神秘主義」(E一一四三)と呼んでいいものである、と。ムージルは、映画論の文脈とは直接かかわり バラージュのいう事物の「象徴的相貌」は、さしあたり「抽象」(Abstraktion)や「分離」(Abspaltung) ⁻別のアポクリファ的連関」(E一一四二)の存在が予感される。 「その場合、〈象徴的相貌〉とは、 ノヴァーリスらがみずからの不可思議な体験に見いだした「あの意識の変化」を想起させるものであり、 ただバラージュの場合、それはクローズ・アップの技法と密接に結びついたものとして論じら ゆるぎな

ることができた。「この不確かな境界線の行方が 後ほぼ二十年を経た四十代半ばのムージルは、へふたつの世界〉に歴史的考察を加え、 かの偏見なしに追求され、明らかにされたことは、残念ながらいまだかつてなかった。だが全人類史をつらぬい ま見た非日常的世界とのあいだで、惑うしかなかった少年テルレスとはちがい、『生徒テルレスの惑い』の発表 貫してムージルの主要な関心事であった。ただ、一見ゆるぎなく堅牢に見える日常的世界と、その背後にかい それも当然かもしれない。〈ふたつの世界の境界〉という問題は、『生徒テルレスの惑い』(一九〇六年)以来、 ―― 理性を装ったものであれ、狂信的なものであれ ―― それぞれに名前をあたえ

驚嘆するのである。

て、ふたつの精神状態へと二分する一本の線が引かれているように思われる」(E一一四三)。その「ふたつの精

神状態」がすなわち、〈通常の状態〉と〈別の状態〉である。

存在とのあいだに、満ちては干く、ある神秘な溶けあいが生じるのである」(E一一四四)。 善悪はあっさりと抜け落ちている」「そして、あらゆるこうした諸関係に代わって、我々の存在と事物や他者の ることに、くりかえし気づくのだ」「この世界の像のなかでは、尺度も精密さもなければ、目的も原因もなく、 献に記された純粋な記述のなかから、共通するいくつかの主要な特徴を取りだすなら、ある別の世界がそこにあ 外の分野における知識でいえば、ほぼ十世紀の段階にとどまっていた。「しかし、これに関する何千年も前の文 は「善の、 代合理主義の精神もまた、その一形態である(E一一四三)。対するに、〈別の状態〉とは、「愛の状態」あるい る歴史上の民族の宗教や神秘主義、倫理のなかにくりかえし立ちあらわれてきた根本体験である。だがそれは、 上の支配者となるまでに発展をとげた。「測定し、計算し、追跡する、実証的・因果的・機械的思考」という近 の「我々の精神の苛烈さ」をいかんなく発揮することによって、もともととるにたらぬ存在であった人間は、 戦性」といった道徳的特性をもつ精神的態度であり、 「奇妙にも発展しないままだった」。〈別の状態〉についての「我々の知識」もまた、つい「最近まで」、それ以 〈通常の状態〉(Normalzustand)とは、「能動性、勇敢、狡猾、不実、せわしなさ、邪悪、狩猟家気質、 世界離脱の、暝想の、 観照の、神への接近の、恍惚の、意志喪失の、内省の状態」等の名で、 世界や他者、 あるいは自分自身にたいする関係の場で、 あらゆ 好 地

とで得たらしい。くわえて、これに関する「我々の知識」は、「最近」飛躍的な進歩をとげたようでもある。そ 〈別の状態〉についてのこうした「知識」を、ムージルはどうやら「何千年も前の文献」を比較しつつ読むこ

直截に連想させる れが具体的に何を指示しているのかという問題は、次節以下で検討することにして、ここでは、この神秘体験を 変し、更新する」(E一一五二)ことにある。つまり芸術は、その享受者に〈別の状態〉を体験させることによ 能力である」(E一一四五)、と。映画に限らず、芸術に「使命」というものがあるとすれば、それはムージルに こったのは、 れることを確認しておかねばならない。右の説明に続けて、ムージルは言う。無声映画では「どの対象物の像」 とって、「その体験を通して経験の公式を破砕し、それによって世界の像、および世界における態度をたえず改 って、一時的にではあれ 「無言の体験」(E一一四四)になるという現象は、この〈別の状態〉の圏域に属するものである。そこで起 たんなる視覚的体験ではなく、「通常の体験全体の破砕」であり、「これこそがあらゆる芸術の根本 〈別の状態〉が、先に述べたバラージュのいう事物の「象徴的相貌」と、ただちに結びつけら 〈通常の状態〉の回路を切断し、「その内容物がそこから流出する力の源」(同上) に触

四)として一度は体験しているし、さらには「強烈な芸術的興奮」(E一一五四)が、それと同等の「純粋な状 態性」(reine Zuständlichkeit E一一五二)の体験をもたらしてくれるのだから。 五三)を引き合いにだす必要はまったくない、 このエッセイの末尾でも、だからムージルは、〈別の状態〉をイメージするために「神秘主義の文献」(E一一 と言う。なぜなら、だれもがそれを「愛の焰」(E一一五三、五

れさせるのである。

みずから変貌することなく変貌する。そして見たところ、対象物が感情を変化させると言うこともできない 世俗的観察の領域から創造的態度の領域へと足を踏みいれると、 そのたびごとに対象物は、

態度のあり方を併せもつ、たとえば小説のような芸術ジャンルである。(E一一五四) ようで、 逆に、感情が対象物を変化させるのだ。この違いをとくにはっきりと見せてくれるのが、ふたつの

そして右の引用部には、さらに次のような註が付されている。 内部に併存させるため、この変貌のメカニズムを認識させるものともなる ―― そうムージルは考えているようだ。 材」(E一一五二)を用いる小説は、映画のように〈別の状態〉を呈示するだけでなく、〈通常の状態〉をもその -世俗的観察の領域」を〈通常の状態〉、「創造的態度の領域」を〈別の状態〉と言い換えれば、前半部で言わ スクリーン上における事物の変貌と同じことであろう。ただ、言語という「公式化そのものの素

gische Erklärung)を求めるのは、見込みのないことではないように思われる。それは、これまで神秘主義 にゆだねられてきた体験様式を、通常の、ふつうはただ隠されているだけの体験様式として、認識させるで そのような理由で、 本稿で〈別の状態〉 として記述されたもののために心理学的解明 (eine psycholo-

あろう。(E一一五四)

おぼえるのは、おそらく私だけではないだろう。 向かう姿勢をいっそう明確にしている。ただしかし、その手がかりを心理学に求めるという。この註に違和感を ここでムージルは、〈別の状態〉の呈示という「芸術の使命」の立場をはなれて、そのメカニズムの認識へと

学的連関とは異なる「別のアポクリファ的連関」内部の現象として、とらえていたはずである。 はいる。だが彼は、 おいても、 同じく文学の使命を認識に求める立場を鮮明に打ちだした一九一八年のエッセイ、『詩人の認識の見取り図』に 人の「事物にたいする特異な態度」と、芸術体験との関係を示唆したさいに、 (ratioides Gebiet/nicht-ratioides Gebiet) という対概念を提出したムージルは、〈非-理性的領域〉こそが、 たしかにムージルは、このエッセイのなかでも、 〈通常の状態〉と〈別の状態〉にほぼ対応するものとして、〈理性的領域〉/〈非-理性的領域〉 ほかならぬ〈別の状態〉の圏域に帰属する、あのスクリーン上における事物の変貌を、 レヴィ=ブリュルの『未開社会の思惟』に報告された、 精神病理学との関連にも言及して さらに言えば、

可能性がはっきりと示すように、けっして無限であるわけではない。 心理学は理性的領域に属すべきものであり、心理学的事実の多様性もまた、経験科学としての心理学の存在 (die seelischen Motive) だけであって、それと心理学とはなんの関係もない。(E一〇二九) はかりしれないほど多様なのは心的動

る。

無限の解答可能性を追求する詩人の領域であると語ったあと、心理学について、次のように断言しているのであ

を求める一九二五年のムージル。心理学にたいするこの評価の落差は、どこからくるのだろうか。 ムージルと心理学 ──彼が心理学とのあいだに取り結んできた、一九○○年代に遡るその浅からぬ関わりを、

への関与を認めない一九一八年のムージルと、

〈別の状態〉の「心理学的解明」

心理学に

〈非-理性的領域〉

心理学研究所に備えつけられるほど普及したものであるらしい。 自身も、一九○六年に「ムージルの色彩回転器」と呼ばれる実験心理学の装置を考案し、この発明によって彼の 験現象学の先駆者としてのみならず、その門下から、のちにゲシュタルト心理学のベルリン学派を形成する多く 学んでいる。当時、ベルリン大学心理学研究室を主宰していたのはカール・シュトゥンプ。シュトゥンプは、 名は、心理学の世界に知られるようになる。これは視覚研究のための実験装置で、その後ヨーロッパのすべての のすぐれた人材を輩出したことで知られているが、その中心メンバーとなるM・ヴェルトハイマー、W・ケーラ ここで簡単に振りかえっておこう。一九〇三年から一九〇八年にかけて、ムージルはベルリンで哲学と心理学を E・M・V・ホルンボステル、K・レーヴィンらは、「ムージルの知人かつ友人たち」であった。ムージル

は、『詩人の認識の見取り図』に限らず、概して心理学への評価は低い。ところが一九二〇年代に入ると、 学へのいくばくかの郷愁をおぼえる」と記されているほどで、そのためか、一九一〇年代に書かれたエッセイで 大学の助手に招聘しようとしたA・マイノングの申し出を断り、作家の道を選んでのちは、次第に心理学から離 の揺籃期の時代に、こうしてムージルは心理学の世界のただ中に身を置いていたのだが、一九〇九年にグラーツ ベルリンがいずれ、W・ヴントのいたライプツィヒに代わって世界の心理学研究のメッカになろうとする、そ 一九一一年十月一日の日記には、「ホルンボステル、ヴェルトハイマーと一緒になる機会があって、

が擁護されるべきなのではなく、心理学の拒否が非難されるべきだ」(E一三四七)と言われているのをはじめ 九二〇年頃に書かれたと推定されるエッセイの草案のなかで、心理学と文学との関係について、「心理小説

あるいはあてどなき旅』(一九二二年)においても、ケーラーの『静止および定常状態における物理的ゲシュタ づけ(Motivation)の能力なのだ」(E一〇五二)と言い、さらにその翌年のエッセイ『寄る辺なきヨーロッパ、 可能性には疑問を呈しつつ、「だが我々がふつう心理学と呼んでいるものは、 として、シュペングラー批判のエッセイ『精神と経験』(一九二一年)では、 ルト』(一九二〇年)に触れて、この書には「古代以来の形而上学的難問の数々を経験科学の領域から解決する 極端にいって人間知であり、 因果的心理学の芸術手法への応用 動機

糸口が、すでに示されている」(E一〇八五)と述べている。

てとることができるが、こうした一連の発言はたんに評価の変化をものがたるにとどまらず、その裏では、 に見られる「世界にたいする別の態度」と精神病理学との関係に関連して —— 付された、もうひとつの註にも見 ための有益な手がかりをあたえてくれる」(E一一四一)という、『新しい美学の萌芽』に ―― 思考との機能的連関から説明しようとする試みが、『新しい美学の萌芽』に先立って行なわれているのである。 の状態〉の「心理学的解明」に向けての作業が始まってもいた。「別の状態」という言葉は、一九二一年から一 人』ですでに使われており、そこでは〈別の状態〉に帰属する忘我や暝想の状態を、感情、 九二三年頃までに書かれたと推定される日記(Heft 25)や、一九二三年のエッセイ草案『徴候としてのドイツ 心理学にたいするこのような肯定的評価への転換は、クレッチュマーの『医学的心理学』は「感情の心理学の 九二〇年代前半のムージルをふたたび心理学に向かわせ、〈別の状態〉の「心理学的解明」へと誘ったもの 知覚、 未開人や芸術体験 剜

|徴候としてのドイツ人|| には、「瞑想の状態にはそもそも不快の感情があるのだろうか」という問いにたい 줖

は、

いったい何だったのだろうか。

まったようなのだ。 想定していた。どうやらこの時期、神秘主義と心理学を結びあわせる契機となる「文献」が、ムージルの目にと 問題にしている註では、〈別の状態〉の「心理学的解明」を、神秘主義に固有の言説に取ってかわるものとして の萌芽』でもムージルは、 して、「それについては宗教上の伝承が語ってくれている」(E一三九六)と自答する一節がある。 〈別の状態〉について語る際に「何千年も前の文献」の存在を示唆し、さきほどから 『新しい美学

二 「境界体験」の発見とブーバー『忘我の告白』

四枚のタイプ原稿が発見された。発見したのは、W・バウジンガー。タイプ原稿の冒頭には、「境界体験」 一九六○年代の前半、ムージルが残したおびただしい遺稿のなかから、 神秘的体験の証言を覚書ふうに収めた

(Grenzerlebnisse) と記されていた。

の存在に言及し、 大な寄与をなした労作であるが、この書でバウジンガーは、それまで知られていなかった「境界体験」なる覚書 れた『特性のない男』の問題点をつぶさに洗いだし、のちの九巻本『ムージル全集』(一九七八年)の成立に多 六四年)は、文献学的手法による遺稿の精緻な解読に基づいて、一九五二年にA・フリゼーを編者として刊行さ バウジンガーの『ローベルト・ムージルの小説《特性のない男》の歴史的・原典批判版のための研究』(一九 それがマルティン・プーバーの編集による『忘我の告白』(一九〇九年)からの抜粋であるこ

とを明らかにしただけでなく、この覚書を媒介としてさらに、(草稿部を含む)『特性のない男』のテクストには、

『忘我の告白』との照応関係がみられることを、はじめて指摘したのである。驚くべき発見であった。

二三、 る。 白を、ほぼ人物別に全五十項目 —— 一九二一年のライプツィヒ版では四十九項目 —— に分けてまとめた書物であ ナ・エメリッヒとラーマクリシュナの言葉がある。(5) る非カトリックの神秘家や、ハシディズムに連なるユダヤ神秘主義者、あるいはまたラービア、ビスターミー れた神秘的忘我体験の記録であるが、特定の教派や宗教に限定されることなく、ヤーコプ・ベーメをはじめとす ーデス』、グノーシスのヴァレンティーノスやモンターヌスの短い断片を経て、『マハーバーラタ』、さらには ルーミーなど、 「老子とその弟子たちの言葉」とされる紀元前時代のものにまで遡り、新しくは、十九世紀のアンナ・カタリー ブーバーが編集した『忘我の告白』は、人類の歴史のなかでこれまで伝えられてきた数多くの神秘的体験の告 その中心を占めるのは、ヒルデガルト・フォン・ビンゲン、ハインリヒ・ゾイゼ、アンジェラ・ダ・フォリ テレサ・デ・アビラなど、十二世紀から十七世紀までのヨーロッパ諸国の修道女・修道士によって証言さ イスラム圏のスーフィーの言葉も収められている。時代的にも、 古くはプロティノスの 「エネア

なかで、 報告するだけである。たとえば、「アンダースは思いがけずもアガーテのなかにいた、あるいは彼女が彼のなか 年に成立したと推定され、「楽園への旅」と呼びならわされている草稿群〈Sょ〉のうち、アンダース(ウルリ 界体験」に入れたのか、バウジンガーはその全貌を明らかにしていない。バウジンガーはただ、一九二四/二五 ヒの前身)とアガーテの愛が近親相姦のかたちをとって成就する部分である〈Sㄐ+7〉草稿を綿密に検討する これら、きわめて多様な時代の、さまざまな宗教文化圏に由来する告白のうち、 テクストのある表現が「境界体験」を介して『忘我の告白』のどの箇所と呼応するかを、 いずれをムージルが選び「境 ひとつひとつ

よる下線)に求める、というふうに。 とまた神を自分の内部に観たのです」 (... shaute sie sich selber und Gott in sich. 経由して、その起源を『忘我の告白』中のゾフィア・フォン・クリングナウの言葉、「そしてふたたび肉体のな された、「彼女(魂)は自分自身とまた彼を自分の内部に観た」(Sie schaute sich selbst und ihn in sich.) に」(Anders war mit einemmal in Agathe oder sie in ihm.)という一文があれば、それは「境界体験」に記 傍点部はバウジンガーに

ルンら、あわせて十七人の神秘家ないし神秘的体験者の言葉と結び合わされていき、さらにそれに付随して、 族の侍童』、ギュイヨン夫人、老子の弟子、カテリーナ・ダ・ジェーノヴァ、メヒティルト・フォン・ハッケボ がある」と言っているが、事実このようにして、わずか二ページほどの草稿中、「境界体験」の媒介を明示され ヒ・ゾイゼ、プロティノス、フェリード=エド=ディン・アッタール、アンジェラ・ダ・フォリニョ、「ある貴 デ・アビラ、エックハルト (これはブーバーの巻頭エッセイ「忘我と告白」から)、ヘメ・ハイエン、ハインリ ていないものも含めて計二十四箇所の表現が、以下次々と、シメオン、スウェーデンのビルギッタ、テレサ・ バウジンガーは〈S4+7〉草稿について、「この節のほとんどどの文にも『忘我の告白』を想わせるところ

我の告白』との対応箇所の数も、その後のR・v・ハイデブラントの調査によって新たに三を加えたが、この二 つもの表現が、『忘我の告白』と関連づけられるのである。その数は、総計六十六箇所におよんでいる。 「夢の章」をはじめとする一九三○年代以降の遺稿部、あるいはまた生前に刊行された『特性のない男』のいく こうしてムージルによるブーバーの編著の大胆な利用の事実が明らかにされ、『特性のない男』における『忘

ルティン・ブーバー《忘我の告白》』(一九七四年)を待たねばならなかった。ムージルとブーバーの関係をはじ つの書物の関連を見いだす鍵となった「境界体験」がどのようなものであるのかを確認するには、 めて詳細に論じたこの書のなかに、ゴルトシュニックは、「境界体験」の写真による複写を図版として収録して ニックの研究書『ローベルト・ムージルのロマーンにおける神秘主義の伝統 《特性のない男》のなかのマ D・ゴルトシ

ュ

くれたのである。 記された四枚の紙片からなるもので、そこには、ただひとつアンドレイ・ベールイ『銀の鳩』の独訳の書名と短 それは、タイプライター文字で一枚に七十四、五行ずつ ―― 最後の四枚目のみは五十四行 ―― 箇条書きふうに

すべてブ

プと手書きによる書込みが、これが『特性のない男』のための覚書であることをはっきりと示すかたちで行なわ がだれの「告白」から取られたものであるかを示す出典は明示されておらず、その代わりにムージル自身のタイ る二ないし三の箇所が連続的につなげられていたりするなどの特徴がみられる。また、いずれの断片にも、 それ以外にも、 がって百十六となる)。各断片の配列については、だが『忘我の告白』の掲載順に抜粋されているわけではなく、 重複して記されているものを含めれば百十五の断片が収められている(ベールイに関わる部分を入れれば、した ーバーの『忘我の告白』のなかの語句ないし文章をそのまま、あるいは自己流に改変して抜粋した、全百十二、 いコメントを記入した部分 —— 二枚目の紙片、真ん中よりやや上に位置する一行半 —— を例外として、 『忘我の告白』で連続して記述されている箇所に改行がほどこされていたり、 逆に、 断続してい それ

こうしたもろもろの点について、その詳細を「境界体験」全体の紹介とあわせて報告するだけの余裕は、

れている。

ながら本稿にはない。ここでは、冒頭の十断片を和訳で紹介するにとどめよう。

霊的な光のひとつの流れが、感覚あるいはもろもろの感覚のうえに満ちあふれる。五八五。

事物の本質の秘密は、明らかでありながらしかし無言で横たわっているように思われる。

心のなかの光と明るさ。(頭のなかではなく)

最上部の領域ではもろもろの色彩が溶けあい、さまざまなものの像も消え去ってしまう。

私たち自身も明るく、軽やか。そのあとではまるで火が消え失せたよう。

夕なき日 : (けれどそのあとどのようにして夕が訪れるのか?)

火から火を得ても火が乏しくならないのと同じような接触が、別の状態ではなんらかの仕方で起こる。この

る幻影のようなものを帯びる。 接触は、そのエネルギーをある行為の発現のために提供してしまうことはない。しかしそれによって、あ

肢体がくまなく光に貫かれる。五八六。

明るくなる。

aZが頭のめぐりをとり囲む。

(かっこ内はムージルによる書込み、傍点部はその手書きによるものである。ここでの書込みには、『特性 のない男』との関連を明示的に読み取ることはできないが、他の箇所では「クラリッセ」「リンドナー」

断片の末尾に書き込まれている。また、第七断片の「別の状態では……」以下の表現は『忘我の告白』に の関連を意識してのものであろう。なお、第一断片と第八断片の末尾に付された数字については、次節の はなく、第十断片の「aZ」は、原典では神を示す「彼」となっている。こうした改変もやはり、 などの登場人物の名や、「兄妹の愛を見よ!」といった言葉が、小説との関連を指示するものとして、 小説と

冒頭で説明する。)

る夏の日の息吹」、未完成ないし初期の草稿である「夢」「楽園への旅」の諸章に集中していること、を突きとめ の四倍以上、約三百にのぼること、(三)そのうちの多くは、完成稿にあたる「聖なる対話」「白昼の月光」「あ 上での大きな寄与だと言わねばならない。 ることに成功した。バウジンガーによる「境界体験」の発見を引き継ぎ、これを飛躍的に前進させる、研究史の おいて『忘我の告白』との対応関係を指摘できる箇所は、バウジンガーとハイデブラントによって報告された数 上げられていること、(二)ひとつの引用が複数回にわたって使われている場合もあるため、『特性のない男』に 的に調べあげ、 ゴルトシュニックは、この「境界体験」を媒介にして『特性のない男』と『忘我の告白』との照応関係を徹底 その結果、(一)「境界体験」に記された百十の断片のうちの九十九が、『特性のない男』で取り

れは、その後のムージルによるブーバー受容、およびムージルと神秘主義をめぐる研究に不可欠の基礎的資料と その成果は、 の順にこの四項目を横並びに配列した、彼独自の三十六ページからなる対照表に詳細に示されていて、そ 〈『忘我の告白』―「境界体験」―『特性のない男』の草稿及び遺稿部 ―『特性のない男』の完

なっている。 ひとりの人間の姿が消え失せてしまってもいる。あたかもそんな人物は存在しなかったかのように。 ブーバーに即すかたちでばらばらに解体して配列しているため、そこからは「境界体験」の成立に直接関わった、 った基本的な誤りをおかしているだけでなく、「境界体験」の各断片を『忘我の告白』の掲載順に、とはつまり ムージルが引いたものとは異なる『忘我の告白』の一節と関連づけたり、ある断片を読み落としたりする、⑴ 境界体験」は、だがじつは、ブーバーの『忘我の告白』から直接に抜粋されたものではなかったのである。 けれども、 ゴルトシュニックはこの対照表で、多くの場合は些細な、 しかし一部では、 ある断片を とい

「境界体験」の成立とギルゲンゾーン『宗教的体験の心的構造』

三

- 境界体験」のタイプ原稿には、それだけを読めば意味不明の数字の付されているところがある。それは一連

の数字の存在を指摘し、かつそれのもつ意味を解読したのは、M・L・ロートの功績である。 存在しているという事実は、バウジンガーによる「境界体験」の発見後も、ながらく公にされていなかった。こ あるが次第にその数の大きさを増していき、最後は六二二に終わる数字群であるが、そのような数字が原稿中に の断片の末尾に散見する、 やはりタイプライターによって印字されたもので、五八五に始まって、断続的にでは

いて、 年)のページ数に対応するものであり、「境界体験」に収められた神秘家の告白は、それまで信じられていたよ ル ロートは、 トシュニックの研究書に先立って公刊された『ローベルト・ムージル この数字が宗教心理学者カール・ギルゲンゾーンの著書『宗教的体験の心的構造』(一九二一 倫理と美学』(一九七二年)にお

の(いわゆる孫引きとしての)引用であることを、明らかにしたのである。バウジンガーによる「境界体験」の うに、ブーバーの『忘我の告白』から直接抜粋されているのではなく、じつはすべてギルゲンゾーンの著書から

発見にも匹敵する、驚くべき事実の発見だと言わねばならない

が、 推測を書き記さざるをえなかったロートの気持ちもわからないではない。推測の根拠としてロートが挙げたのは、 なかった」とまで言いきっている。この推測についてはのちに異論が出されることになるけれども、 係に差しはさまれていたベールイの『銀の鳩』に関わる記述もまた、この書の引用と引用の谷間にあたる該当ペ かの最終章で著者が大量に引用している『忘我の告白』中の言葉のうちから、 的な印象となって迫ってくるのである。「境界体験」中の全百十五の断片が、七百ページを越えるこの大著のな ゲンゾーンの 右に述べたページ数の一致に基づく、「境界体験」のギルゲンゾーンからの引用という事実だけであるが、ギル より、ごく単純に『宗教的体験の心的構造』にそれが書かれていなかったからであろう。前節で「境界体験」の しているためだし、各断片を語る神秘家の名が出典として記されていないのも、 ージ(六〇三頁)の脚註に見いだせる。同じ断片が重複して取られているのは、ギルゲンゾーンが重複して引用 -ジルが個々の告白を「はじめから〔……〕神秘的体験を言語化するための媒介として」書きとめた結果という この事実をもとにロートは、「ムージルはおそらくブーバーの『忘我の告白』を原典にあたって読んだのでは ただしそのうちの五箇所には、多少の前後が見られる ―― 少しずつ選択しつつ再引用されたものであること 疑いえない事実として確認できるだけではなく、「境界体験」に唯一の例外として、『忘我の告白』とは無関 『宗教的体験の心的構造』を参看するとき、その事実は、予想されるものをはるかに凌駕する圧倒 しかもその引用順序にしたがって バウジンガーが言うように、 このような

概要を紹介したさい、そこに見られる配列その他の特徴として挙げたいくつかの事柄は、 これがギルゲンゾーン

の著書からの抜粋だとわかれば、このように驚くほど明快に説明がつくのである。

によるプーバー受容を前提とするゴルトシュニックの研究は、その存立を根底から突き崩され、砂上の桜閣と化 が事実であり、 シュニックだっただろう。「境界体験」がギルゲンゾーンの『宗教的体験の心的構造』をもとに作成されたこと めぐる論考を学位論文として提出し(一九六九年)、それを世に問うべく一冊の書の出版を企図してい だがロートの報告にだれよりも驚いたのは、当時すでに上述の研究成果をもとにムージルとブーバーの関係を もしもロートの言うように、ムージルが『忘我の告白』を読んでいなかったとすれば、ムージル

づいて、 ゴルトシュニックは、 にあたって『忘我の告白』との約三百におよぶ関連箇所を突きとめるという、驚嘆すべき仕事をなし終えていた けれども、そうはならなかった。九巻本全集が刊行される以前に、『特性のない男』の既刊部と遺稿をつぶさ ムージルがやはり『忘我の告白』にも眼をとおしていたと主張したのである。 おそらくこの作業の過程で通暁するにいたったのであろう、両書に関する知識と理解に基

してしまうからである。

ではなく —— 敷きとして使われている)が書かれたと推定される一九二四/二五年の間に確定できることを指摘し、 ートの報告については事実として認めたうえで、であれば、「境界体験」の成立が ―― ロートのいう一九二六年 ゴルトシュニックはまず、「境界体験」がギルゲンゾーンの『宗教的体験の心的構造』から抜粋されたとのロ ムージルは『忘我の告白』を読んでいなかったとするロートの推測については反証を試みる。第一に、 ギルゲンゾーンの書が刊行された一九二一年から、「楽園への旅」(そこですでに「境界体験」が下 しかしな

白』を読んだと考えはじめて説明可能である、と。 これはギルゲンゾーンにも「境界体験」にも引かれていない。こうしたことはすべて、ムージルが『忘我の告 秘的エクスターゼの証言について語るウルリヒの言葉には、「忘我と告白」におけるブーバーの言葉との一致が バーの巻頭エッセイ「忘我と告白」に依存しており、第二に、作品中ウルリヒが 「千年の書」についての記述は、ギルゲンゾーンを引き写しただけでは出てこない。第三に、伝承されてきた神 (Für und In) は、 『特性のない男』における神秘主義の核となる「別の状態」の考えは、あきらかに『忘我の告白』に寄せたブー 第四には、 『忘我の告白』に収められたカテリーナ・ダ・ジェーノヴァの「告白」に由来するものだが、 『特性のない男』の草稿中、 ある章の表題として使われている対句「ために 『忘我の告白』を暗示していう なかに

場合には、「境界体験」の成立にギルゲンゾーンが関わっていたことが、それどころか、そもそも「境界体験 〕 の 我と告白」にまで分け入るその論述がかなりの説得力をもっていたためであろう、ゴルトシュニックに対する正 ずるとして、それ以上に大きな問題としてここで指摘しておきたいのは、ゴルトシュニック以降、 面からの反論は、 反証となっているのは第四の指摘だけである。。だが、事実として呈示されたこの第四の反証の力に加えて、「忘 ルゲンゾーンの関係、 ルトシュニックが論拠として挙げた以上の四点のうち、三点までは読みの解釈に関わる事柄であり、明白な 『忘我の告白』も読んでいたにちがいないと考えているけれども、この問題についての詳述は別の機会にゆ 現在にいたるまで見られない。私もまた、ゴルトシュニックと同様、(※) あるいはムージルのギルゲンゾーン受容についての研究がなおざりにされ、 ムージルはやはりブーバ ムージルとギ はなはだしい

の存在すらもが、忘れられているという事態である。

ソロジー『忘我の告白』(イェーナ、一九〇九年)から引用された神秘家の言葉が書き留められている」といっ(※) 場合でも、「ムージルは一九〇九年に刊行されたマルティン・ブーバーの『忘我の告白』を詳細に抜粋しだ」と 負の遺産だと言えるであろう。 うな事態は、 た、ロート以前に後退してしまう記述がなされている有様である。ギルゲンゾーンの忘却とでも呼びうるこのよ ーの『忘我の告白』と結びつけられることはけっしてまれではなく、ときに「境界体験」の存在に言及している(タン) にもギルゲンゾーンにも触れることなく、ゴルトシュニックを参照のこと、という註とともに、ただちにブーバ =ブーバー〉のラインへと再び引きもどしたゴルトシュニックが、結果的にもたざるをえなかった強い影響力の、 か、「《境界体験》という見出し語のもとに、ムージルの遺稿中のタイプ原稿には、 あたかもロートの発見がなかったかのように、『特性のない男』における神秘家の引用の問題が、「境界体験」 「境界体験」をめぐってロートが見いだした〈ムージル=ギルゲンゾーン〉のラインを〈ムージル マルティン・ブーバーのアン

なかにギルゲンゾーンを配置するだけで、「境界体験」の成立の時点にまでさかのぼって、 しかし、こうした例外的事例にしても、あるいはこれまでの経緯の確認にとどまり、あるいはみずからの文脈 ムゼンはその才気あふれる論述のなかで、何度かこの『宗教的体験の心的構造』の著者の名を呼び出してもいる。 ⁽³⁾ ない。「境界体験」の成立をめぐるいきさつを整理した報告が、少なくとも二例出されているほか、R・ヴィ .しはムージルに及ぼした影響が中心的テーマとして検討されることは、もはやないと言っていい。 正確を期すために言い添えておけば、ゴルトシュニック以後も、ギルゲンゾーンに触れた事例がないわけでは ムージルとの関係な

だが私は、ムージルのブーバー受容について論じるためにも、いちどその原点に立ちかえって、「境界体験」

る基本的誤りは、ギルゲンゾーンを軽視したことに起因するものだし、『忘我の告白』と「境界体験」の媒介者 ターを通してムージルを見ること ―― この原点への立ちかえりが、ムージルにおける神秘主義と心理学の問題を な誤りないし思わぬ誤解が生じる危険性のあることを、否定できないからである。ギルゲンゾーンというフィル としてのギルゲンゾーンの存在を抜きにして、ムージルのブーバー受容を語ろうとするとき、そこに、 の成立した現場を具体的に把握しておくことが、不可欠だと考える。事実、ゴルトシュニックの対照表に見られ より重大

四 ギルゲンゾーンの宗教心理学

考察するための、鍵となる作業であることは言うまでもない。

はじまる実験心理学の影響をうけ、実証科学の立場から宗教現象を解明しようとする姿勢を鮮明に持ちあわせて それほど容易ではないだろう。一八九〇年代にアメリカを中心に勃興してきたこの学問は、だが当時、ヴントに その流れをくむ深層心理学の存在を連想させるくらいで、その学問像を統一的かつ具体的にイメージすることは、 と呼ばれる領域に属する研究書である。宗教心理学、といっても、いまではおそらくフロイトやユング、および カール・ギルゲンゾーン(一八七五-一九二五)の『宗教的体験の心的構造』(一九二一年)は、宗教心理学

験者に質問紙を配布し、そこで得られた回答(応答資料)をもとに、統計的手法をもちいて分析する方法であり、 この姿勢は、 宗教心理学の黎明期に確立されたふたつの方法のなかに具体化されている。ひとつは、 いた。

かな心〉と〈病める魂〉という宗教的人格類型を析出したW・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』(一九〇二 E・D・スターバックの『宗教心理学』(一九○○年)によって、手記資料に基づく研究は、この方法で〈健や 次元から分析する方法である。応答資料に基づく研究は、この方法で青年期における回心の平均年齢を推定した 宗教者や思想家の自伝、日記、手紙、告白などの文書記録(手記資料)をもとに、 個人の内面

教的体験の心的構造』は、宗教心理学史上、前期あるいは第一期として位置づけられているこの時代の、ドイツ にいたるまでおおいに興隆をみた。一九二一年に上梓されるまで十年の年月をついやしたギルゲンゾーンの『宗 年)によって、それぞれ礎石を築かれ、以後宗教心理学は、このふたつの著作の強い影響のもと、一九二〇年代

タントの神学者として、宗教学の立場から心理学研究の道に入ったギルゲンゾーン独自の歩みも見て取ることが れ自体、創成期における宗教心理学の展開を示す貴重なドキュメントになっているが、そこにはまた、プロテス 紙法と同一の方法ではない。自らの方法論についてあらかじめ詳述した、三十五ページからなる「序文」は、そ における応答資料に基づく研究の代表例とされる大著である。(3) ただし、同じ応答資料に基づく研究とはいえ、この書でギルゲンゾーンが採択したのは、スターバックの質問

理解に到達できない、宗教学の現状である。物理学や化学をはじめとする他の諸科学が過去百年のあいだに飛躍 るのに比べ、宗教学の世界では、宗教哲学者がさまざまな問題を「根本から、そしてはじめから」たえずあらた 彼がまず問題とするのは、シュライエルマッハー以来すでに百年を経て、いまだに宗教の普遍妥当的な科学的 その成果がすべての研究者の共有財産となり、これを基礎にしてさらなる探求が行なわれてい

に基づく宗教心理学」の確立を要請する。むろん、宗教それ自体を実験対象とすることはできない。「だがおそ 回想録などの不確実な資料に依拠する宗教史的研究とは一線を画した科学的宗教心理学、すなわち「実験的事実 的思考もまた、 に考え直している。だが、「化学をラヴォアジエにかえって改革したい」などとだれも思わないように、「宗教学 こうして実験的宗教心理学を志向するにいたったギルゲンゾーンの次の問題は、テーマとしてかかげた「宗教 宗教的体験をした人間を対象とする実験はできるだろう」(G一二)、と。 確実な基礎をもつ科学的研究の道へ転じるべき時だ」(G四)—— そう考えるギルゲンゾーンは、

学的宗教現象への編愛に加えて、現象分析と類型選択の基準にはなはだしい恣意性が見られるし、スターバック 彼の先駆者であるアメリカの宗教心理学者たちの試みを起点として始まる。彼らに共通する経験論には共感しつ とをみずから記録するという、自由連想法を応用した実験を試み、それに成功するのである。これはのちに辿り だが彼はフロイトの自由連想法に見いだす。一九○九年に発表されたある精神分析学派の論文に触発されて、フ 法であった。「そんな不可能なこと」(G二〇)とみずから思わざるをえなかったそのような方法の手がかりを、 答資料を引きだすことのできる方法、しかも厳密な方法原理に基づいたうえで、そうすることができるような方 らである。ギルゲンゾーンが求めるのは、実験によって、被験者自身その内容を前もって予測できないような応 の質問紙法では、 的体験の心的構造」を解きあかすための、厳密な方法を確定することであった。その模索は、当然のことながら、 ロイトの手法を検討したギルゲンゾーンは、このとき、いくつかの宗教的テクストを読んでそのさい連想したこ しかしギルゲンゾーンは、ジェイムズにもスターバックにも満足できない。ジェイムズの類型学には、 被験者の自己検閲を経た回答しか得られないため、真実ありのままの心理をとらえられない 病理

のだが、にもかかわらず、最終的に彼が選んだのはフロイトの方法ではなかった。 つく方法の原型となるものであり、その成功は、 彼の求める科学的宗教心理学の実現を約束するように思われた

る。無意識を引きだすフロイトの方法には賛同しつつ、しかしその結果としての性理論には懐疑的だったギルゲ 質』(一九一○年)に遭遇し、それを契機により強く、ヴュルツブルク学派の思考心理学に惹かれていくのであ フロイトの方向でさらなる実験を進めようとした、その直後、ギルゲンゾーンはN・アッハの『意志行為と気

自己観察法は、 が高等精神作用の実験的研究のために確立した(心理学的訓練を経た人びとを被験者として行なわれる)体系的 ンゾーンにとって、アッハのいう「意識性」(Bewußtheit)の概念、すなわち「非直観的に存在する意識内容」 ルート」で指し示すものとしてきわめて魅力的であったし、 (G二一)の発見は、従来の心理学では検出できなかった「目に見えない」意識の存在を、フロイトとは フロイトの方法に劣らぬ厳密さを保証してもいた。思考心理学の成果と方法に依拠するなら、 しかも、アッハをはじめとするヴュルツブルク学派 「別の

の予感は、ヴュルツブルク学派の創始者O・キュルペとその弟子K・ビューラーのもとで学ぶ機会を得て、 やが

「宗教的体験の心的構造の把握を一変させる」(G二二) ことも可能となろう —— ギルゲンゾーンのいだいたこ

て確信に変わる。

のような方法である。 ギルゲンゾーンが、 なおも試行錯誤を繰りかえし、フロイトの自由連想法をも一部取り入れて確定したのは、次

こうして体系的自己観察法という、「今日の心理学研究の技法が生み出した最上のもの」(G二五)を修得した

―― 共同研究者としての被験者をギルゲンゾーンはこう呼ぶ ―― は、実験者の指定した宗教的内

実に書き取り、場合によっては、さらにその詩から連想したことについての報告も求めて、「読みの実験記録 容の詩をいつもの自然なテンポで読み、そのさい感じたこと、考えたこと、体験したことを、読後ただちに報告 詩を一篇読むごとに、右の作業が繰りかえされるわけである。 が、二十三—二十六番には、神への愛を抒情的かつ非教義的に表現した詩が、とくに集められている。これらの リケらの詩やスペインのリートなどだが、そのうち八ー二十二番には、神への信仰をさまざまな強度でうたう詩 の宗教的詩歌集』(一九○七年)に収められた、フォンターネ、ニーチェ、ヘッベル、アイヒェンドルフ、メー 者が読むのは、二十六の番号を付された計二十八篇の詩。主として『失われた教会から――ドイツの家庭のため を作成する。この間、観察者が読みおよび報告に要した時間はストップウォッチで計測され、 (観察者にはあらかじめ、 読後に詩の評価をせよという指示が出されている)。実験者は観察者の報告を忠 記録される。

歌と好きになれない賛美歌について、二回目は、信仰を確信する決定的な根拠について、三回目は、 終えるまでに、二回目は七番と八番の詩のあいだに、三回目は十七番と十八番の詩のあいだに)、それをもとに て、それぞれ実験者の問いに観察者が答えていく形式で、対話が交わされる。 「対話の実験記録」が作成される。これは「読みの実験記録」を補完するもので、 次に、この「読みの実験記録」を作る過程で、実験者と観察者は三回の面談を持ち(一回目は七番の詩を読み 一回目の面談は、 信頼につい 好きな賛美

実験者が、 者が熟考のうえその答えを出すというもので、二十二番と二十三番の詩のあいだに差しはさまれる。 神の概念一般、 右のふたつの実験記録をさらに補完するものとして、「思考試験の実験記録」が作成される。 神の全能、 神の永遠、 神の愛といった、 教理問答の概念の説明を観察者に求め、 これ

として —— 彼自身が観察者となったときには、彼の妻を実験者として —— 行なわれた。 たちである。この実験は一九一一年二月十二日から一九一三年四月二十六日にかけて、ギルゲンゾーンを実験者 から三十七歳までの、女性は二十歳から三十五歳までの、いずれも当時の高等教育を受けた、いわゆるインテリ 以上の実験に参加した観察者は、ギルゲンゾーン本人を含む男性七人、女性七人の計十四人。男性は二十三歳

三年後にベルリンに赴いたムージルと直接出会うことはなかったとしても、ギルゲンゾーンとムージルは、 に二十代半ばのほぼ同時期に、シュトゥンプの放つ厳密さのエートスを呼吸しているのである。 科学的雰囲気は、だが師の功績であった。この師が優秀な弟子たちを持ったのは、きっとたんなる偶然ではなか ドストエフスキーを「精神的にあまりにも厳密でない」として斥け、『特性のない男』では、感情や思想を計算 みだしたムージルは、一九三〇年代後半になってもなお、「シュトゥンプ学派」の厳密さに触れて、「あの醒めた 尺で測定しようとするような工学的知性に魅了される人物 —— 彼、ウルリヒがはじめて小説に登場する場面 だわりが、ムージルと無縁ではないと思われたからである。『生徒テルレスの惑い』を書きはじめたころすでに、 っただろう」(TI九二五)と述べている。シュトゥンプの「弟子」とは言えないが、じつはギルゲンゾーンも しているのである。「ストップウォッチ」を手に実験記録を作成する、ギルゲンゾーンを想わせる姿で ――を生 一巻二章)は象徴的だ。ウルリヒは「時計」を手にして窓べに立ち、眼下を通過する歩行者や車の運動量を計算 九○○/○一年の冬学期に、ベルリン大学でシュトゥンプの「卓越した講義」(G一六)を聴いている。 ギルゲンゾーンの方法をめぐるいささか長い紹介となったが、それというのも、そこに見られる厳密性へのこ

ギルゲンゾーンの厳密さは、その方法にとどまらない。実験が完了した一九一三年の時点で約七百ページに達

ずはじめに心理学の一般的基礎づけとして「感情生活の多様性」を明らかにし(I章)、続いて宗教的体験にお していた実験記録と格闘すること八年、彼はこの膨大な応答資料をもとに、「宗教の価値判断」と「宗教的確! の特徴」(G三一)を究明する仕事に取り組んだ。その成果として提出された『宗教的体験の心的構造』は、ま 能力も私にはないが、次節では、 タイルにしろ、きわめて綿密かつ精緻なものである。そのすべてを紹介する余裕も、その学問的価値を評価する のうえで新たな自説を展開し、さらにその根拠となる実験記録の該当箇所を大量に提示するという基本的論述ス れた宗教的自己告白」によって検証する(N章)という全体構成にしろ、これまでの学説をつぶさに検討し、そ ける「感情」(Ⅱ章)と「表象および意志過程」(Ⅲ章)を分析し、最後にそうして得られた結論を「記録に残さ の心的構造」(G二六)、より具体的には、「宗教的体験を非宗教的体験から区別する、宗教的体験一般の形式上 ルゲンゾーンの仕事がムージルにあたえた影響を推察してみたい。 本稿のテーマであるムージルにおける神秘主義の心理学の問題に限定して、ギ

註

- (1) Robert Musil: Gesammelte Werke in neun Bänden. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978. ページ数〉で指示。 Bd. 8 (Essays und Reden), S. 1142. ムージルのエッセイからの引用は、以下、同版により、本文中に〈E+
- (2)aus Anlaß Robert Musils. Berlin 1971. S. 268 Hans-Wolfgang Schaffnit: Mimesis als Problem. Studien zu einem ästhetischen Begriff der Dichtung
- (3)Vgl. Hannah Hickman: Musils Essay "Literat und Literatur" Form und Gestalt in Wissenschaft und Kunst, In: Kunst, Wissenschaft und Politik von Robert Musil bis Ingeborg Bachmann. Hrsg. von Josef

八四

Strutz. München 1986. S. 37.

- (4)ジ数〉で指示。 の『日記』からの引用は、以下、同版により、本文中に〈TI(= Bd. 1)もしくはT Π (= Bd. 2)+ペー Robert Musil: Tagebücher. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1976. Bd. 1, S. 240. ムーふぇ
- (5)ティン・ブーバー編『忘我の告白』(田口義弘訳)法政大学出版局、一九九四年。 田口義弘「ブーバー『忘我の告白』について(《付録》ムージル「限界体験」)」『季刊現代文学』第四十五号、 一九九二年、五一頁を参照。なお、 プーバーの『忘我の告白』は、現在では翻訳でも読むことができる。マル
- (6)Mann ohne Eigenschaften". Reinbek bei Hamburg 1964. S. 450 Wilhelm Bausinger: Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman "Der
- Bausinger: a. a. 0.
- 8 a. a. O. S. 450ff. 9 a. a. O. S. 458ff.
- schaften". Ihr Zusammenhang mit dem zeitgenössischen Denken. 2. Aufl. Münster 1969. S. 220f. Renate von Heydebrand: Die Reflexionen Ulrichs in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigen-
- (11)Dietmar Goltschnigg: Mystische Tradition im Roman Robert Musils. Martin Bubers "Ekstatische Konfessionen" im "Mann ohne Eigenschaften". Heidelberg 1974. S. 68ff.

(12)

的資料のひとつとして公表するつもりである。 この写真図版には、とくに第一面に判読のきわめて困難な部分がふくまれていたが、その作業はすでに完了し 録された写真図版を可能なかぎりそのまま復元したかたちで、新たな訳を呈示する作業に共同で取りくんだ。 たものであり、また一部に印刷上の誤りもあったため、その後田口氏と私は、ゴルトシュニックの研究書に収 バー『忘我の告白』について」に「付録」として添えられたその訳は、だが訳者による編集と注釈が加えられ 「境界体験」の全訳は、すでに「限界体験」の名で田口義弘によってなされている。註(5)に挙げた論文 いずれムージル(およびギルゲンゾーン)による『忘我の告白』引用の実態を紹介するさいに、基礎

(13) るけれども、正しくは、すでに述べたように、重複して記されているもの、およびベールイに関わるものを除 いても、百十二である。註切と個を参照されたい。 ニックの誤読に由来する誤り。ゴルトシュニック以降、ほぼすべての研究者がこの数字を無批判に踏襲してい ゴルトシュニックは「境界体験」に記された断片数を百十としているが、これは後述するように、ゴルトシュ

(14)Goltschnigg: a. a. O. S. 75.

(16) (15) a. a. O. S. 114.

a. a. O. S. 78ff

ひとつは、 ものの歌」の一詩行に基づいている。 ているが(Goltschnigg: a. a. O. S. 106)、正しくはアルメル・ニコラから取られた独立の断片である。もう 摘した (a. a. O. S. 98) ひとつは、第三面・第二断片の「脱成してしまって。」(Entworden sein.)で、これもゴルトシュニックが指 イヨン夫人の言葉と見なし、 第一面・第二四断片の「魂の拡散。」(Ausbreitung der Seele.)で、これをゴルトシュニックはギ ヘルラッハ・ペーテルスに見られる類似の表現から取られたものではなく、「露なる 続く第二五断片「限りない遙けさのなかに置かれる。」と合わせて一つと数え

(18) 第二面第十断片の「一日中そうして逃れ、そして観て。」(Den ganzen Tag so fliehend und sehend.)。これ 結果、突きとめることができたものであって、別の言い方をすれば、ゴルトシュニックがギルゲンゾーンの存 葉である。前註印で指摘したものもふくめて、こうした誤りは、私がみずからギルゲンゾーンを参照し、『宗 は見落としているけれども、じつはやはり『忘我の告白』に収められたアンナ・カタリーナ・エメリッヒの言 はおそらく、次行に挙げられたベールイ『銀の鳩』からの引用と見なされたためであろう、ゴルトシュニック 在を軽視したことの証しだと言えよう。 教的体験の心的構造』の引用順にほぼしたがって「境界体験」を作成したムージルのやり方を追体験してみた

(19)Marie-Louise Roth: Robert Musil. Ethik und Ästhetik. München 1972. S.

(20)a. O. S. 54.

O. S. 371

즞

- Bausinger: a. a. O. S. 460.
- (23)しれない。 Vgl. Roth: a. a. O. S. 237. ただし、 ロートはその根拠を挙げていない。あるいは「一九二一年」の誤植かも
- Significant Goldschnigg: a. a. O. S. 63f
- (5) a. a. O. S. 64.
- Robert Musil. In: TEXT+KRITIK. Heft 21/22 (Robert Musil). 2.Aufl. München 1972. S. 80 たいする、揶揄的な書評ならある。Vgl. Jürgen C. Thöming: Kommentierte Auswahlbibliographie zu von Martin Buber, in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften".» Graz 1969 [Masch.]) 보 ただし、ゴルトシュニックの研究書のもとになった学位論文(k"Ekstatische Konfessionen", gesammelt
- (27) Ästhetische Subjektivität und historische Reflexion bei Robert Musil. München 1992. S. 79. usw "Der Mann ohne Eigenschaften" Münster 1990. S. 27; Frank Maier-Solgk: Sinn für Geschichte Zustand der Dichtung. Interpretationen zur Sprachlichkeit des "anderen Zustands" in Robert Musils S.152; Thomas Pekar: Die Sprache der Liebe bei Robert Musil. München 1989. S.284; Gerd-Theo Tewilt: Vienna. London/Sydney 1984. S. 160; Eckhard Heftrich: Musil. Eine Einführung. München/Zürich 1986 Abstraktion. Frankfurt am Main/Bern 1982. S. 64; Hannah Hickman: Robert Musil and the culture of Eine Interpretation von Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften" unter Leitbegriff der ohne Eigenschaften" Berlin 1981. S. 171; Martin Menges: Abstrakte Welt und Eigenschaftslosigkeit. Vgl. Werner Graf: Erfahrungskonstruktion. Eine Interpretation von Robert Musils Roman "Der Mann
- (28)Jahrhundert. Stuttgart 1989. S. 129. Martina Wagner-Egelhaaf: Mystik der Moderne. Die visionäre Asthetik der deutschen Literatur im 20
- (29) Gabriele Dreis: "Ruhelose Gestaltlosigkeit des Daseins" Pädagogische Studien zum "Rousseauismus" im Werk Robert Musils. München 1992. S. 65
- (30)Vgl. Joseph Strelka: Auf der Suche nach dem verlorenen Selbst. Zu deutscher Erzählprosa des 20.

- Jahrhunderts. Bern 1977. S. 118ff. und 159; Hans-Joachim Völse: Im Labyrinth des Wissens. Zu Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften" Wiesbaden 1990. S. 101f
- (31) Vgl. Roger Willemsen: Das Existenzrecht der Dichtung. Zur Rekonstruktion einer systematischen Literaturtheorie im Werk Robert Musils. München 1984
- (32)体験」との関わりを知ることなくギルゲンゾーンに言及し、一九三〇年以降の遺稿のなかでムージルがギルゲ Albertsen: Ratio und "Mystik" im Werk Robert Musils. München 1968. S. 41f.)。 このアルベルツェンの ンゾーンを繰り返し引用していることに加えて、『宗教的体験の心的構造』には、ムージルの「境界体験」と ゴルトシュニック以前に眼を転じるなら、古くはE・アルベルツェンが、すでにロート以前に、 体験の心的構造』の骨子をなす「読みの実験記録」の作成にギルゲンゾーンが使用した詩(本稿第四節を参 ュニックとほぼ同時期には、J・C・テーミングが、——こちらはたぶんロートの示唆を受けて ——『宗教的 報告が、おそらくはロートによるギルゲンゾーンの「発見」に示唆を与えたものと思われる。また、ゴルトシ 同様、プーバーの『忘我の告白』からの引用が見られるという、注目すべき報告を行なっている(Elisabeth München/Salzburg 1974. S. 68ff.)° に歌わせていることを指摘し、これをもとに彼の著書の一章をさいて、「カール・ギルゲンゾーンの受容検 査」とムージルの関わりについて論じている(Jürgen C. Thöming: Zur Rezeption von Musil-und Goethe-Texten. Historizität der ästhetischen Vermittlung von sinnlicher Erkenntnis und Gefühlserlebnissen のうちのひとつであるスペインのリートを、ムージルが『特性のない男』の遺稿部のある章でリンドナー つまり「境界
- (3) 註(18)を参照されたい。
- lebens の誤り)。R・オットーの、「哲学的な立場の研究であるが、その聖意識の分析は、宗教心理学的にも 構造 Der Seelische Aufbau des Religiösen Erlebnis, 1921》としているが、筆者下線部のErlebnis は、 簡単にではあるがギルゲンゾーンの『宗教的体験の心的構造』が紹介されている(岸本は《宗教体験の精神的 貴重なものである」と言われる『聖なるもの』(一九一七年)を別にして、純粋に心理学と呼べる分野の著作 『心理学事典』平凡社、一九五七年を参照。この旧版の事典の 〈宗教心理学〉の項には、岸本英夫によって、

- としては唯一名指しされた、ドイツにおける前期宗教心理学の成果として。ところが、同事典の改訂版である 『新版心理学事典』(平凡社、一九八一年)になると、同じ〈宗教心理学〉の項に、もはやギルゲンゾーンの
- 的要素があるため一概には言えないものの、「ギルゲンゾーンの忘却」は、心理学の世界でも起こっていると 名を見ることはできない。執筆者の交代、〈宗教心理学〉という項目にあたえられたスペースの縮小など、外
- helm Arnold/Hans Jürgen Eysenck/Richard Meili. Neuausgabe. Freiburg/Basel/Wien 1980)の〈宗教 いうことか。ただし、より詳細なドイツの心理学事典("Lexikon der Psychologie" 3Bde. Hrsg. von Wil-
- こんだ記述が見られる。 心的構造』についても、思考心理学の方法で宗教的経験の特殊性を研究したものとして、その内容にまで踏み 心理学〉の項には、ヴュルツブルク学派の一員としてギルゲンゾーンの名が挙げられており、『宗教的体験の
- (35) Karl Girgensohn: Der seelische Aufbau des religiösen Erlebens. Eine religionspsychologische Unter-らの引用は、以下、本文中に〈G+ページ数〉で指示。 suchung auf experimenteller Grundlage. Leipzig 1921. S. 4. ギルゲンゾーン『宗教的体験の心的構造』か
- (36)phisches), S. 956 Robert Musil: Gesammelte Werke in neun Bänden. Bd. 7 (Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiogra-